

令和 6 年 5 月 30 日現在

機関番号：13901

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2018～2023

課題番号：18K00475

研究課題名(和文)再統一後のベルリンにおけるナチズムとホロコーストの記憶の空間表象

研究課題名(英文)The Nazi past and memory landscapes in Berlin after the reunification

研究代表者

安川 晴基 (Yasukawa, Haruki)

名古屋大学・人文学研究科・准教授

研究者番号：60581139

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,200,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、再統一後のベルリンに登場した種々の記念碑、ミュージアム、公共芸術を、それらの1)クロノトポスと、2)社会・政治的文脈の観点で分析し、それらが織り成す首都の記憶の景観が、今日のドイツのいかなる社会・政治的アジェンダを反映しているかを調べた。今日のベルリンを特徴づける脱中心的な記憶の景観は、1980年代の市民運動の中から生まれ、再統一後に制度化され恒常的な想起の場となった。その背景には、現在の民主的社会を維持しようとする市民社会のイニシアチブと、冷戦後の新たな国政秩序の中で、「西側の価値と利益を共有する共同体」に自己より深く統合しようとする連邦共和国の記憶政策が収斂したことがある。

研究成果の学術的意義や社会的意義

近年ドイツではいわゆる「想起の文化」が社会と政治のさまざまな領域で営まれている。ナチズムの負の過去の批判的見直しと、それをめぐる諸々の論争は、ドイツ社会に民主主義的価値観を定着させるのに大きな役割を果たした。また、ナチズムの加害の過去を自国で想起するという特殊な課題に直面して、種々の革新的な想起の場が生まれた。本研究は、再統一後のドイツの「想起の文化」とそのさまざまな空間実践の事例を提示することで、未解決の歴史問題を抱えている日本の社会に、自国の負の過去といかに向き合うべきか示唆を与えようとするものである。

研究成果の概要(英文)：This project studied, how the past of the Nazism and that of the Holocaust are symbolized and rearranged in the public space in Germany after the reunification. Especially, my project aimed at analyzing on monuments, museums and public artworks created in Berlin after 1990. Following two points were drawn considerable attention in my study: 1) chrono-topos of places of remembrance and 2) historical, political and social context of these symbolical objects. In this way, I analyzed how today's German citizens intend to share their own negative history socially, and inherit it to the next generation. The results indicated that Germany's self-critical "culture of memory" intends to symbolize the Nazi past as a contrastive self-image, on one hand in order to strengthen the liberal-democratic basis of the reunified society, and on the other hand so as to integrate the Federal Republic deeper to the "western community of shared values and interests" called the EU.

研究分野：ドイツ語圏の文学・文化

キーワード：想起の文化 ドイツ ナチズム 記憶

### 1. 研究開始当初の背景

戦争で破壊され、戦後は壁によって分断されたベルリンは、かつての都心に無数の空白箇所を抱えた。しかし再統一後、それらの空白箇所にナチズムの負の過去を象徴する「記憶の場」が新たに書き込まれ、都市の景観が大きく塗り替えられた。都市の景観もまた、その社会の「集合的記憶」を支える重要な枠組みである。1990年代以降、人文学において主導概念の一つとなった「集合的記憶」の考え方によれば、私たちが私たちの「過去」と見なしているものは、想起(と忘却)の営みがなされるその都度の現在の解釈と選択と変形の産物である。それは過去のありのままの存在を反映しているのではなく、むしろ、私たちの現在の要請・希望・願望を映し出している。通常、集合的記憶は自己肯定的である。肯定的な自己像に合致しないものはそこから排除される。それに対して、再統一後のドイツでは、自国の否定的な負の過去が積極的に可視化されている。今日のベルリンの景観を特徴づけている、このナチズムの負の過去の遍在は、いかなる社会・政治的アジェンダを反映しているのだろうか。この問題設定のもとに本プロジェクトを開始した。

### 2. 研究の目的

本プロジェクトは、主に1990年代以降のベルリンに登場した、ナチズムとその犯罪をテーマとする種々のモニュメント、ミュージアム、パブリックアートを調査した。それら個々の「想起の空間」を、この都市のトポグラフィーに位置づけ直して相互に関連付けて考察することで、それらが総体として、今日のベルリンの記憶の景観をどう刻印しているのかを記述し、その記憶の景観から読み取れる、再統一後のドイツ社会の歴史認識と新たな集合的アイデンティティの構想を明らかにすることを意図した。

### 3. 研究の方法

本プロジェクトは(1)ドイツでのフィールドワークと、(2)戦後ドイツの「想起の文化」についての概論的研究からなる。

(1)本研究の主要部分をなすのが、再統一後のドイツ、とりわけベルリンに設置された、ナチズムとその犯罪をテーマとする、種々のモニュメント、ミュージアム、パブリックアートに関するフィールドワークである。それら「想起の空間」の現地踏査と、資料館での関連資料の調査を通じて、とりわけ以下の点を明らかにすることに主眼を置いた。まず、それらの「想起の空間」のクロノトポス(象徴方法、展示空間の配列、来訪者の視線と歩行の動線など)。すなわち、それらが過去のイメージをどのように可視化しているか、そこではどのような歴史認識が明示的・暗示的に分節されているか、という問いである。第二に、それらの「想起の空間」の歴史的・政治的・社会的コンテクスト(設立の経緯、設立主体による意味付与、社会的受容)。すなわち、どのような人々によって、また、いかなる問題意識のもとに、これら種々の「想起の空間」は生み出されたのか、という問いである。

(2)ドイツでのフィールドワークと並行して、戦後ドイツの「想起の文化」に関する研究を行った。「想起の文化」(Erinnerungskultur)は、1990年代以降によく用いられるようになった語で、ナチズムの負の過去をめぐるコメモラシオン(記憶の共同化)の営みの総称である。戦後ドイツでは、ナチズムの過去は、時期によって異なる社会・政治的枠組みのもとに、抑圧と見直しの対象となった。本プロジェクトでは、この記憶の社会・政治的枠組みの変遷をあとづけながら、上記の種々の「想起の空間」が成立した経緯を再構成した。また本プロジェクトの理論的支柱の一つをなす「集合的記憶」の概念、とりわけ、アライダ・アスマンとヤン・アスマンの提唱した「文化的記憶」のコンセプトに関する研究を行った。

### 4. 研究成果

(1)2018年度は主に、壁崩壊後のベルリンに設置された、ナチズムとホロコーストをテーマとするモニュメント、ミュージアム、パブリックアートを対象にして、現地調査と文献調査を行った。このフィールドワークと並行して、戦後ドイツの「想起の文化」についての研究を行った。その成果として、アライダ・アスマン著『想起の文化：忘却から対話へ』(岩波書店、2019年)を翻訳し、出版した。刊行にあたって、昨今のドイツの「想起の文化」をめぐる議論について解説を書いた。また、ドイツの「想起の文化」の種々の試みと比較するために、日本におけるトラウマ的過去をめぐる想起の空間実践を調べた。具体的には、原爆資料館(広島市)、大和ミュージアム(呉市)、リアス・アーク美術館(気仙沼市)の現地踏査と資料収集を行った。

(2)2019年度は、ドイツでのフィールドワークで収集した資料の研究を行ない、本プロジェクトの成果を公表するために準備している単行本『想起のトポグラフィー：再統一後のベルリンにおけるナチズムの過去と記憶の景観(仮題)』の執筆を進めた。また、ドイツの事例と比較するため、日本国内(長崎市と水俣市)における、トラウマ的記憶を対象とした展示施設とメモリアル

の实地踏査と資料収集を行なった。これらと並行して、本プロジェクトの理論的支柱の一つをなす「文化的記憶」のコンセプトに関する研究を行なった。その一環として、ヤン・アスマン著『文化的記憶』の翻訳を進めた。

(3) 2020年度は、新型コロナウイルス感染拡大による渡航制限のため、当初予定していたドイツでのフィールドワークを実施することができなかった。その代わりに、本プロジェクトの成果を公表するために準備している単行本『想起のトポグラフィ(仮題)』の執筆に集中的に取り組んだ。その中でも、ドイツ歴史博物館、ベルリン・ユダヤ博物館、記録センター「テロルのトポグラフィ」、および「カウンターモニュメント」と呼ばれる革新的な記念碑を扱った諸章(第1章~4章)の執筆を進めた。また、再統一後のドイツの「想起の文化」の研究と並行して、集合的記憶についての理論的研究も行なった。

(4) 2021年度は、当初の計画では、ドイツでのフィールドワークと資料収集を重点的に行なう予定だった。しかしながら、新型コロナウイルス感染拡大による制限のため、2020年度に引き続き、海外渡航を断念せざるを得なかった。その代わりに、単行本『想起のトポグラフィ(仮題)』の執筆を進めた。とりわけ、同書の第5章に相当する「ホロコースト記念碑」についての記述を進めた。また、「文化的記憶」の理論的研究の一環として、ヤン・アスマンの主著の一つである『文化的記憶』の翻訳し、「文化的記憶」のコンセプトに関する詳細な解説を執筆した。これは「文化的記憶」のコンセプトの特徴と意義を、人文学における「集合的記憶」論の系譜に位置づけて考察したものである。なおこの成果は、福村出版から2024年6月に刊行される予定である。

(5) 2022年度は、当初の計画では、ドイツでフィールドワークを行う予定だった。しかし、新型コロナウイルス感染拡大による制限のため、2020年度、2021年度に引き続き、渡航を延期せざるをえなかった。それゆえ2022年度は、それまでに収集した資料の整理と分析を行なった。そして、本研究の成果を公表するために準備している単行本『想起のトポグラフィ(仮題)』の執筆に専念した。具体的には同書の第6章をなす「『周辺』の試み」と、第7章をなす「想起のプロジェクト『躓きの石』」をまとめた。この二つの章は、1980年代以降にベルリンの各地に誕生した、種々の「脱中心的記念碑」を扱ったものである。また、「文化的記憶」のコンセプトを含む、種々の「集合的記憶」の概念を、「歴史」の概念と対照させながら比較考察した論文を執筆した。この成果は論文集『古代地中海世界と文化的記憶』(周藤芳幸編、山川出版社、2022年)の序章「文化的記憶とは何か」として発表した。

(6) 2023年度は、ベルリンとヴァイマールでフィールドワークを行ない、ナチズムの過去を都市空間で指し示す「想起の場」の事例について資料を収集した。また、単行本『想起のトポグラフィ』の執筆(特に終章)を進めた。この成果は2025年に岩波書店から刊行される予定である。本プロジェクトでは、1990年代以降のドイツで広く展開している「想起の文化」を、種々の空間実践を例にとって調べた。それらの設立の経緯を見ると、あるパターンが見られる。戦後ドイツでは、ナチズムの負の過去は広範に不可視化されたが、1980年代以降、(西)ドイツで市民を主体として、ナチズムの加害の現場がマークされ始めた。当初はまだ周縁的で対抗的だったこの「下からの想起」の運動は、再統一後、ベルリン州や連邦政府の公的な記憶政策に吸い上げられ、制度的に支えられるようになった。こうして、今日のベルリンの記憶の景観を特徴づける脱中心的な記憶の景観が生まれるにいたった。その背景には、現在の民主的社会を維持しようとする市民社会の努力、そして、冷戦後の新たな国政秩序の中で、西側の価値共同体の一員として自己を正統化しなければならない連邦共和国のアイデンティティ・ポリティクスがあることがわかった。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計1件（うち査読付論文 0件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 安川 晴基	4. 巻 増刊12
2. 論文標題 自国の負の過去にどう向き合うか：ドイツの「想起の文化」と空間実践	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 臨床心理学	6. 最初と最後の頁 158-164
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計0件

〔図書〕 計2件

1. 著者名 周藤 芳幸	4. 発行年 2022年
2. 出版社 山川出版社	5. 総ページ数 464
3. 書名 古代地中海世界と文化的記憶	

1. 著者名 アライダ・アスマン、安川 晴基（翻訳）	4. 発行年 2019年
2. 出版社 岩波書店	5. 総ページ数 288
3. 書名 想起の文化：忘却から対話へ	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8 . 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------